

# 上代の敬語 (一)

—— 畏敬・讃称・美称の接辞および尊称のオホ ——

田 中 みどり

はじめに

一 畏敬・讃称・美称の接辞

一―イ (ツ)、ユ (ツ)

一―二 マ

一―三 ミ

一―四 サ

一―五 タ

一―六 フト、タマ、タカ

二 讃称のトヨ・ウヅノと尊称のオホ

二― トヨ、ウヅノ

二― オホ

〔附〕 カミ

従来、ほめ詞・美称の接辞と呼ばれているイ (ツ)・ユ (ツ)・マ・ミ・フト・タマ・タカなどは、カミに対する畏敬に発し、讃称ともなる。サ・タも同類の接辞である。そしてマ・ミ・サ・タマなどは美称にもなる。トヨ・ウヅノなどは、イ (ツ)・ユ (ツ)・マ・ミ・サ・フト・タマ・タカなどが讃称として用いられるようになったのと平行して使用された、新しい讃称のことばである。

イ (ツ)・ユ (ツ) は「齋」「嚴」を、ミは「かしこまり」をあらわす。マは「真正な」、カは「暗い」、サは「清澄な」、タは「すつかり」をあらわす。副詞に至るものではあるが、そのような意味を与える自然の働きを、人々は、カミの力と見なしていた。それが、畏敬の思いとなる。

この時代、ミは畏敬・讃称・美称の接辞である。オホミは、尊称のオホと讃称のミの二語である。

## はじめに

日本語の言語体系は、古学者たちにより、平安時代中期頃のものを中心に考えられてきた。契沖（一六四〇～一七〇一年）のかなづかい、富士谷成章（一七三八～一七七九年）の文法論など、その功績は大きい。幕末・明治の国学の風潮は、本居宣長（一七三〇～一八一一年）の言語論を中心に置いており、明治以後の学校教育の中で文法論もその流れである。そのため現在の古典語研究は、平安時代ものを規範として、その他の時代の言語は、変化しているものを補うにとどまっている。山田孝雄（一八七三～一九五八年）の奈良朝文法史・平安朝文法史などは画期的なものであったが、その後、上代の言語と平安時代以後の言語は、別々に研究されていて、上代の言語の研究の成果は、古典語の研究の中に活かされていないのが現状である。

ここでは、上代の敬語のうち、畏敬・讃称・美称の接辞と尊称のオホについて論じる。上代の接辞には、現代では意味が不明になっているものも多いが、そこに、わずかに見えている畏敬・讃美などに、古い時代の人々が、自然に對して（すなわちカミに對して）もっていたおそれを知ることができる。

記紀萬葉には、「吾妻はや 阿豆麻波夜」（記中巻）・「吾

兄を 阿西鳴」（紀七六歌謡）・「吾夫君、此云阿我儼勢」（神代紀一書第七）・「我鳥 和杼理」（記三歌謡）・「汝鳥 那杼理」（記三歌謡）など、ア・ナがノ・ガを介さず直接体言に係るものがある。また、「…大舟を 漕ぎわが行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ…」（萬葉卷第十五3627）のように、主格接辞（ワガ）が動詞の直前につくものがある。これらの接続の形式は、古い日本語の形式で、アルタイ諸言語と古い日本語の似ている例のひとつである（拙著「日本語のなりたち」二〇〇三年、ミネルヴァ書房。ここに述べる畏敬・讃称・美称の接辞も、同様に、語に直接する形で、それぞれの意味を付与するものである。これは、古い時代の敬語のありかたのひとつである）。

これまでの敬語論で避けられてきたのは、カミに對する敬語である。敬語は、カミに對するものと、カミを祀る長老や力の強いものに對するものと、ふたつの方面から発つする。しかるに、日本の敬語論の中では、対人関係の敬語と、神話などに用いられたカミへの敬語について、言及するにとどまっている。これは、仏教伝来以来、日本のカミが過去のものとなったこと、天武朝ないし平安朝以後は、人間中心の世界観が広がって、自然への畏敬を忘れてしまったことによる。人々が素朴にもっていたカミの觀念を見ることがなく、上代の敬語を語ることはできない。

時代別国語大辞典上代編（三省堂 一九六七年）「ゆ」

の【考】の中に、「元来神に関連のある、信仰的価値に対して与えられたほめ詞が美称となる」と言っている。が、「ほめ詞」である以前に、カミに対するかしこまりの思いがあつて、それこそがカミに対する敬語の基底である。従来、この素朴なカミへの畏敬を顧みず、カミ觀念が、神話や形式化した神祇から出発しているため、カミへの敬語を正當に位置付けてこなかった。この論では、古い時代の人々が、カミに対してもつていたおそれを中心述べる。

従来、ほめ詞・美称の接辞と呼ばれているイ(ツ)・ユ(ツ)・マ・ミ・フト・タマ・タカなどは、カミに対する畏敬に発つし、讃称ともなる。サ・タも、同類の接辞である。そしてマ・ミ・サ・タマなどは美称にもなる。トヨ・ウツノなどは、イ(ツ)・ユ(ツ)・マ・ミ・サ・フト・タマ・タカなどが讃称として用いられるようになったのと平行して使用された、新しい讃称のことばである。

### 一 畏敬・讃称・美称の接辞

上代のことばに、ほめ詞とか美称の接辞と呼ばれるものがある。

い(つ)、ゆ(つ)、ま、み、ふと、たか、とよ、たま、うづの

などである。春日和男氏は、ほめ詞を讃称語とし、美称・讃称を合わせて讃美称語と名付けている。

「はじめに」に述べたように、「神に関連のある、信仰的価値に対して与えられたほめ詞が美称となる」が、その「ほめ詞」は、それ以前に、カミに対するかしこまりの思いがあつて、それこそがカミに対する敬語の基底である。それを畏敬の接辞と名付けておく。すなわち、ほめ詞・美称の接辞を、畏敬の接辞・讃称の接辞・美称の接辞の三類に分けて考える。

### 一 イ(ツ)、ユ(ツ)

イ(斎)は、ユ(斎)・ユツに同じで、カミの神聖を言うことばである。また、カミの莊嚴を表わす「嚴」イツもある。これらは、自発の助動詞「ユ」とも同源である。

ちはやぶる 神の斎垣(神之伊垣)も 越えぬべし  
今はわが名の 惜しけくもなし

〔萬葉集卷第十一 2663 寄物陳思〕

(岩波新日本古典文学大系『萬葉集 三』二〇〇二年、以下同じ。ただし、訳文は、適宜、勘考する。)

斎串(五十串)立て 神酒する奉る 祝部が うづの  
玉かげ 見ればともしも

〔萬葉集卷第十三 3229 雜歌〕

霜に寄せき

はなはだも 夜ふけてな行き 道の辺の ゆ笹(湯小竹)の上に 霜の降る夜を

〔萬葉集卷第十 2336 冬の相聞〕

(岩波新日本古典文学大系『萬葉集 二』二〇〇〇年、以下同じ)

十市皇女の伊勢神宮に参り赴きし時に、波多の横山の巖を見て、吹芟刀自の作りし歌

河上の ゆつ岩群(湯都盤村)に 草生さず 常にも  
がもな 常娘子にて

〔萬葉集卷第一 22 雑歌〕  
(岩波新日本古典文学大系『萬葉集 一』一九九九年、以下同じ)

御諸の 巖白梔が本(伊都加斯賀母登) 白梔が本  
忌々しきかも 白梔原嬢子

(古事記九十二歌謡)  
(岩波日本古典文学大系『古代歌謡集』土橋寛 校注、一九五七年、以下同じ。但し、訓は適宜、勘考する。)

伊都能知和岐知和岐弓

(古事記上巻 天孫降臨)  
(岩波日本古典文学大系『古事記 祝詞』一九五八年、以下同じ。一二八頁)

稜威道別道別

〔神代紀第九段一書第二〕

(岩波日本古典文学大系『日本書紀 上』一九六七年、以下同じ。一四九頁)

これらのイ・ユ・ツツ・イツはいずれも、かしこき神の神聖を言う畏敬の接辞である。

若桜部朝臣君足の雪の歌一首

天霧らし 雪も降らぬか いちしろく このいつ柴  
(五柴)に 降らまくを見む

〔萬葉集卷第八 1643 冬の雑歌〕

道の辺の いつ柴原(五柴原)の いつもいつも 人の許さむ 言をし待たむ

〔萬葉集卷第十一 2770 寄物陳思〕  
のイツは、讃称である。

さらに、

山部宿祢赤人の不尽山を望みし歌一首 短歌を并せ  
たり

：天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ  
照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり(伊去波伐加利)： 〔萬葉集卷第三 317〕

額田王の近江国に下りし時に作りし歌、井戸王の  
即ち和せし歌

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに  
い隠る(伊隠)まで 道の隈 い積もる(伊積流)ま  
でに： 〔萬葉集卷第一 17〕

の「い行きはばかり」「い隠る」「い積もる」などでは、天

地に関わることや、自然にそうなることに、イが用いられている。人為の及ばないことがらである。動詞に付くこのイも、「い垣」「い串」「ゆ笹」「ゆつ岩群」など名詞に付くイと、そしてまた自発の助動詞ユと同源である。

## 一二 マ

隠り国の 泊瀬の河の 上つ瀬に 斎杵(伊久比)を  
打ち 下つ瀬に 真杵(麻久比)を打ち 斎杵には  
鏡(加賀美)を掛け 真杵には 真玉(麻多麻)を掛  
け 真玉なす 吾が思ふ妹 鏡なす 吾が思ふ妻 あ  
りと言はばこそよ 家にも行かめ 国をも偲はめ

### 「古事記九十歌謡」

この歌では、「斎杵」と「真杵」、「鏡」と「真玉」とが対になっている。「鏡」と「玉」とは、「妹妻」への序となつていのであるが、その場合、「鏡」「玉」は、「大切な宝物」の義であろう。「玉」の方に「真」(真正な・完全な・純粹な)の意をもつことば)が付いているのは、鏡が3音であるため、音数を整える意味もあるが、鏡も玉も祭具であるから、そのとき選ばれたマということばは祭具である玉の神聖さを表わす。大系本『古代歌謡集』古事記九十歌謡「読歌」の補注にも、

◇この二首(引用者注) 記八九歌謡・九十歌謡)の

「読歌」は恋歌であるが、一段に提示されている景物は、祭儀に関係のある幡、鏡、玉などで、発想の母胎は寿歌にあるらしく、あるいは寿歌の曲節で歌われたものかとも想像される。(『古代歌謡集』一一九頁)とあり、もともとマが神聖さを表わしたものであるという考えを裏付ける。

次に、「杵」に付くものは、「斎杵」「真杵」と対置されている。鏡・玉を掛ける「杵」もまた祭祀に関わる神聖なものである。「斎杵」について『古代歌謡集』頭注に

◇斎み清めた杵。川瀬で行われる祭儀(六月祓、夏神楽など)の景物を提示している。

と言う。

マは、「真正な・完全な・純粹な」の意をもつことばである。真正なもの、完全なもの、純粹なものは、カミの姿(理想)である。そして、マがイ(斎)に対置されているところに、カミへの畏敬が読み取れる。

ところで、辻村敏樹『敬語の史的研究』(一九六八年東京堂出版。一九九四年 第五版)には、次のような記述がある。

◇今日の「お」や「ご」は対人関係に基づいた表現で敬語の範疇に入れることができるのに対し、上代の美称の「み」や「ま」はそういう性質のものでないという

点においてはつきり一線を引くことができます。

(同書 七七頁)

ここでは、敬語を、対人関係に基づくものと規定している。また、同書には、

◇ 美蘇良行く雲にもがもなけふ行きていもにこと

どひあすかへり来む (万葉・十四・三五一〇)

上つ瀬に斎杭を打ち下つ瀬に麻久比を打ち斎杭には鏡をかけ麻久比には麻多麻をかけ (記歌・

九〇)

これらの「み」や「ま」がどういう性質のものであつたかは、実はその語源を知らなければつきり言えないものと思いますが、おそらくはそのものをたたえることばであつたろうと思われる。しかしそれはまだ敬語とは言えないもので、後にそれが神や天皇や尊ぶべき人のものをたたえて言うために用いられるようになった時、はじめて敬語らしい敬語となつたものと考えます。

(同書 七七頁)

ともあり、ミやマを「そのものをたたえることばであつたろう」と考えている。

右に述べたように、マには「カミへの畏敬」を表わすものがあり、記九十歌謡のマは、その例である。「そのものをたたえることば」として用いられるのは、

四年丁卯の春正月、諸王諸臣子等に勅して授刀寮に散禁せしめし時に作りし歌一首・短歌を并せたり  
ま葛延ふ(真葛延) 春日の山は うちなびく 春さ  
り行くと：  
『萬葉集卷第六 948』  
の「ま葛」のような例で、これは後の用法である。

### 一三 ミ

右に掲げた辻村敏樹『敬語の史的研究』に、

美蘇良行く雲にもがもなけふ行きていもにことどひあすかへり来む (万葉・十四・三五一〇)

の例があつた。この「み空」の場合、美称のように見える。時代別国語大辞典上代編「み」の項に、

◇接頭語。畏敬の念をもつて物を指すときや物をほめたたえていうときに用いる。

と言ひ、【考】に、

◇：以上は敬語の接頭語として用いられた例であるが、

その他、㊦マやユ・ユツなどのような、美称といわれる用法の例もあり(ミ草・ミ空・ミ冬・ミ陰・ミ酒等)、その中に㊧地形名にミのついたもの(ミ山・ミ嶺・ミ坂等)と、㊨器物の名についたもの(ミ甕・ミ籠・ミ鉤・ミ杯・ミ掘串)とが顕著に認められる。㊩はおそらく元來神の場所であつたからと思われ(↓み

さき【考】、㊦を合めて㊧は神・信仰との関係を求めることができる（↓ゆ「斎」【考】）。

③ と言う（傍線、引用者）。また、

藤白の 御坂を越ゆと 白栲の 我が衣手は 濡れに けるかも

〔萬葉集卷第九 1675 雑歌〕

（新潮日本古典集成『萬葉集 二』一九七八年 新潮社）

の「藤白の御坂」についての、新潮日本古典集成の頭注には、

◇接頭語「御」は峠の神への畏怖を表わす。

（同書 三七九頁）

と言う。「そのものをたたえることば」ではなく、「神への畏怖」である。上代の美称・讃称の接辞は本来、かようなカミへの畏れと敬いよりうまれたことばである。「み吉野」のように、地名に付くものも同じである。

大宰の時の梅花に追和せし新歌六首

み冬（民布由） 継ぎ 春は来たれど 梅の花 君にし  
あらねば 招く人もなし

〔萬葉集卷第十七 3901 大伴書持〕

（岩波新日本古典文学大系『萬葉集 四』二〇〇三年。以下同じ）

の「み冬」は、大いなる自然の運行にかしこまる思いを表

わしたものである。辻村敏樹氏の挙げた、美称のように見える、

東歌

み空（美蘇良） 行く 雲にもがもな 今日行きて 妹  
に言問ひ 明日帰り来む

〔萬葉集卷第十四 3510〕

も、

貧窮問答歌一首 短歌を并せたり

：日月は 明しと言へど あがためは 照りやたまは  
ぬ（多麻波奴）：

〔萬葉集卷第五 892 山上憶良〕

で日月をあがめる表現をしているように、「空」をあがめた「大いなる空」という語感があるであろう。地上のものをつつむ大空を見上げて、その偉大さを意識して、「み空」と言ったものである。

額田王の歌 未だ詳らかならず

秋の野の み草（美草）刈り葺き 宿れりし 宇治の  
みやこの 飯廬し思ほゆ

〔萬葉集卷第一 7〕

の「み草」は、天皇の飯廬に関わる草であるので、神聖な草であることを表わしたものであつて、讃称の例である。

この岡に 草刈る童 然な刈りそね ありつつも 君  
が来まさむ み馬草（御馬草）にせむ

〔萬葉集卷第七 1291 旋頭歌〕

の「み馬草」のミは、美称と言つてよい。このようにミには、畏敬を表わすもの・讃称・美称がある。

また、一語的になった「ミヤ（宮）」「ミコト（命）」のようなものもある。「ミキ（御酒）」については、萬葉集卷第六973の歌に「キ 酒」の例もあるから、必ずしも「ミキ」で一語的になっているとまでは言えない。このミは、後の時代の対人関係に基づく尊敬語に連なるものであるが、この時代には、讃称の接辞である。

一四サ

へ一一へに挙げた

山部宿祢赤人の不尽山を望みし歌一首 短歌を并せたり

の反歌は、

田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ（真白衣）  
富士の高嶺に 雪は降りける

〔萬葉集卷第三 318〕

である。「ま白に」は混じりけのない白さを表現したものである。このように、色を表わすことばに接辞のついたものには、「ま朱」「か黒し」「か青し」「さ青なる」「さ丹塗り」などがある。

真金吹く 丹生の真朱の（尔布能麻曾保乃） 色に出て 言はなくのみそ あが恋ふらくは

〔萬葉集卷第十四 3560 東歌〕

「まそほ」は辰砂（赤色）である。

世間の住まり難きを哀しめし歌一首 序を并せたり  
： 蜷の腸 か黒き髪に（迦具漏伎可美尔） 何時の間  
か 霜の降りけむ 紅の 一に云ふ、「丹のほなす」 面の  
上に いづくゆか 皺が来たりし：

〔萬葉集卷第五 804 山上憶良〕

柿本朝臣人麻呂の、石見国より妻を別れて上り来たりし時の歌二首 短歌を并せたり

： きたづの 荒磯の上に か青く生ふる（香青生）

玉藻沖つ藻： 〔萬葉集卷第二 131〕

「蜷の腸 か黒き髪に」の用例や海の藻の色から考えて、カはどす黒い色であろう。

物に怕れし歌三首

人魂の さ青なる君が（佐青有公之） ただひとり

逢へりし雨夜の 葉非左思所念

〔萬葉集卷第十六 3889〕

「サ青なる」は現代語訳すれば「マッサオナ 真つ青な」であろう。

山上臣憶良の七夕の歌十二首



…さ丹塗りの(佐丹塗之) 小舟もがも 玉巻きの  
ま懼もがも… 『萬葉集卷第八 1520』

久迹の新京を讃めし歌二首 短歌を并せたり

…さ雄鹿の 妻呼ぶ秋は 天霧らふ しぐれを疾み  
さにつらふ(狹丹煩歷) もみち散りつつ(黄葉散  
乍)… 『萬葉集卷第六 1053』

「に 丹」は赤土である。はじめの「そほ」が朱すなわち  
赤色であるのに対し、「に」は赤土の色で、赤色から黄色  
までの色相である。朱を含む場合もあり、含まない場合も  
ある。右の804の歌にも、

紅の 一に云ふ、「丹のほなす」 面(久礼奈為能 一云 尔

能保奈須 意母提)

という表現があった。「栲乃穗尔 たへのほに」(萬葉集卷  
第一79)の例もあって、「ノノ穗」は真にその色である  
ことを言う。ニホフ(「紅にほふ 紅丹穗経」萬葉集卷第  
十三3227)という動詞形もあるほどに、色が明るく輝  
くさまがニノホナスでとらえられている。ニホフは紅の色  
と多く関わるから、ニは本来は赤色を言うものであろう。  
さらにニホフは、色彩全般にも使われる。また、「つつじ  
花 にほへる君が(香君之)」(萬葉集卷第三443)など  
の用字から、ニホフは「香」についても使われたと考えら  
れる語である。

また、1053の歌で「さにつらふ」は「もみち 黄  
葉」にかかっているところから、ニは黄色であるかとも考  
えられるが、萬葉集において「もみち」はほとんど全て  
「黄葉」の用字であることと、「さにつらふ」のかかるこ  
とばは外に、「吾大君」「君」「妹」「紐」「色」などである  
ため、健康な頬の色をさす「赤い」をいったもので、ニホ  
フと同じように美しさを賞める賞めことばになったものと  
考える。

これらのマ、カ、サは同じような働きで用いられたもの  
であろう。日本の古代色「白黒青赤」のうち、白にはマ、  
黒にはカ、青にはカとサ、赤にはマとサが付いている。  
「カ青し」のある一方に「サ青なる」があり、「マそほ」  
のある一方に「サ丹」があり、使い分けられていたもので  
あろう。その用いられた歌の内容から推して、「マ白」「マ  
朱」は純正な色を言い、「カ黒」「カ青」はどす黒い色、  
「サ青」「サ丹」は澄みきった濁りのない色をさすもので  
あろう。

このサは、右にも挙げた萬葉集1053の歌にある「さ  
雄鹿 左牡鹿」のサや、

油火の 光に見ゆる わが繰 さ百合の花の(佐由利  
能波奈能) 笑まはしきかも

『萬葉集卷第十八 4086 大伴家持』

八千矛の 神の命は…さ婚ひ（佐用婆比）に 在立たし 婚ひに 在通はせ…

…青山に 鵲は鳴きぬ さ野つ鳥（佐怒都登理） 雉は響む 庭つ鳥 鶏は鳴く…

〔古事記二歌謡〕

のサにも繋がる。

サは「五月」の意であると考えられている。

昼者如五月蠅而沸騰之…五月蠅、此云左魔倍

〔神代紀下〕

の「五月」を「左」と訓んでいるところからである。が、わが背子が 国へましなば ほととぎす 鳴かむ五月

（佐都奇）は さぶしけむかも

〔萬葉集卷第十七 3996 介内蔵忌寸繩麻呂〕

の例もあるから、「五月」は本来はサツキであつてサではなく、「如五月蠅」は「五月ごろの蠅のように」（時代別国語大辞典上代編）の意義であるために「五月」の字を用いたにすぎないものである。サミダレを「五月雨」と書くのと同趣である。これは、万葉仮名によつて表わす音と万葉仮名として使われた漢字のもつ本来の意義とが、関連する例の一つである。

平安時代にも「早苗」「早乙女」（田植えに關係する）などの語がある。田植えの時期は五月頃であるから、やはり、

サと五月は關係があるようにも思える。しかし、萬葉集に「さ蕨 左和良妣」（萬葉集卷第八1418）の用例がある。蕨の時期は三月から四月である。蕨の時期は三月から四月、田植えの時期は五月頃、旧暦では春から夏ということになる。草木が芽を出し勢いよく伸びる季節である。右に、

「サ青」「サ丹」は澄みきつた濁りのない色をさすものであろう。

と述べた。このことと、草木が勢いよく伸びることを重ね合わせてみれば、サの意義は、「清澄なこと、伸び伸びしていること」である。自然の営みを讃えるものである。が、それ以前に、自然への畏敬があるであらう。

なぜならば、右に「さ雄鹿」「さ百合」の例を挙げたが、奈良においては、鹿は春日大社のカミの使いであり、率川神社の三枝祭（ゆり祭）は文武天皇の大宝年間から伝わる祭で、鹿や百合はカミとの關係が深いからである。また、後の時代に、田植え神事に仕える少女を「早乙女」と呼ぶようになった例があることも、このことを裏付ける（三重県伊雑宮の御田植祭は、倭姫命にまつわる穂落とし伝説に由来する。平安時代末期から鎌倉時代に今の形になったとされる）。田植え神事は、ヤマトノクニが、水田耕作経済を基盤とし、土地の首長はクニツカミとして、まつりごと

《政ニ祭》をつかさどったことに關係する。この田のカミに仕える少女を「サヲトメ」と呼ぶのは、カミへの畏敬をあらわすものである。

以上のことより、「さ雄鹿」や「さ百合」のサは、カミへの畏敬をあらわすものである。「さ婚ひ」のサは八千矛の神に対する讃称、「さ野つ鳥」のサは美称である。

## 一五 タ

古事記九一歌謡には、

…い組竹 い組みは寝ず た繁竹（多斯美陀気） 確  
には率寝ず…

のように、イとタが並置されているものがある。このタは、「タ童」「タ走る」「タもとほる」「タ遠し」「タゆらに」など、多くの語に接するものである。その意義は「すつかり」であろう。これについては、畏敬の用例を見つけることはできなかった。右の古事記九一歌謡にイと並置されているのは、讃称である、と考える。

以上、サ・タは、従来、ほめ詞・美称の接辞の類には入れられてこなかった接辞であるが、これらも、イ(ツ)・ユ(ツ)・マ・ミなどと同じ、畏敬・讃称・美称の接辞と考える。

イ(ツ)・ユ(ツ)は「斎」「嚴」を、ミは「かしこま

り」をあらわす。マは「真正な」、カは「暗い」、サは「清澄な」、タは「すつかり」をあらわす。副詞に至るものがあるが、そのような意味を与える自然の働きを、人々は、カミの力と見なしていた。それが、畏敬の思いとなる。

## 一六 フト、タマ、タカ

次に、沖森卓也編『日本語史』（おうふう 一九八九年）では、敬語を、

### ◇素材敬語

尊敬語

為手尊敬

主体を上位扱い

「……す・さす」

謙讓語

受手尊敬

対象を上位扱い

「……奉る」

丁重語

為手卑下（かしこまり）

為手を下位扱い

「……侍り」

美化語

話し手の品位保持

「御……」

対者敬語

丁寧語

聞き手尊敬

「……侍り」

に分け（同書、一〇〇頁）、

◇尊敬語は既に七世紀から見られますが、この尊敬語に

は、体言に見られるものと用言に見られるものとがあら  
ります。体言に見られるものには、種々の接頭語があ  
げられ、「おほみ」「みー」、また美化語的な「ふと  
ー」「たまー」などがあります。

(同書、一〇二頁)

と言う。この書では、「ふと」「たま」などを尊敬語としつ  
つも、美化語的なものとしている。同書では、美化語は  
「話し手の品位保持」の語と規定しているから、「ふと」  
「たま」もそれに準じて考えているのであろう。しかし、  
乃ち天兒屋命(あまのこやねのみこと)をして、其  
(そ)の解除(はらへ)の太諄辞(ふとのりと)を掌  
(つかさど)りて宣(の)らしむ。

〔神代紀第七段一書第三〕

〔『日本書紀 上』一一九頁〕

### 造酒の歌一首

中臣の 太祝詞言(敷刀能里等其等) 言ひ祓へ 贖  
ふ命も 誰がために汝

〔萬葉集卷十七 4031 大伴家持〕

などのフトは、「祝詞」を立派なものであるといい、その  
向かう先のカミに敬意を表するものである。

吉野宮に幸しまひし時に、柿本朝臣人麻呂の作  
りし歌

やすみしし わが大君の 聞こしをす 天の下に…宮  
柱 太敷きませば (太敷座波) …

〔萬葉集卷第一 36〕

冬十月、難波宮に幸しまひし時に、笠朝臣金村  
の作りし歌一首 短歌を并せたり

…続麻なす 長柄の宮に 真木柱 太敷敷きて (太  
敷而) 食す国を 治めたまへば…

〔萬葉集卷第六 928〕

などのフトは、宮を建てる行為を讃めたたえたものである。  
この時代には、「美化語的な」フトはない。

次にタマについて。

### 七夕

明日よりは 吾が玉床を (吾玉床乎) 打ち払ひ 君  
と寝ねずと ひとりかも寝む

〔萬葉集卷第十 2050〕

の場合、「床」は、彥星との逢瀬の象徴であるので、神聖  
なものとしてタマを付した。

柿本朝臣人麻呂の、妻死して後に、泣血哀慟して  
作りし歌

家に来て わが屋を見れば 玉床の (玉床之) 外に  
向きけり 妹が木枕

〔萬葉集卷第二 216〕

のタマは、亡くなった妹との「床」を大切に思うものである。このタマは妹の霊（タマ）とも響き合つて、死者の御霊に対する厳肅な鎮魂の思いもこめられる。

水門の 葦が中なる 玉小菅（多麻古須気）刈り来  
わが背子 床の隔しに 『萬葉集卷第十四 3445』  
の「玉小菅」は、そのような神聖な床の隔となる草であるので、タマが付いたものである。

…真玉手（麻多麻傳） 玉手（多麻傳）さし枕き 百  
長に 寝は寝さむを… 『古事記三歌謡』  
の「手」にタマが付いているのも、「手」は「枕」となるものであるから、神聖なものなのである（ここには、さらに、マさえも付いている）。頭や顔や足には、このタマは付かない。これらのタマは美化語ではなく、美称ですらもない。神聖なものを讃める語であるから、讃称の名がふさわしい（その奥には、神聖なものへのかしこまりの思いがある）。

「玉藻」「玉葛」など、植物に付いているものは、そのものの美しさを賞める美称である。こうして、讃称の接辞は、そのものを賞める美称となる。これは、「話し手の品位保持」ではなく、美称の冠されたモノの価値を認めることであるから、「美化語的なもの」とは言えない。たとえば現代語の「御」は、尊敬語の場合と美化語の場合とが

あるが、フトもタマも、畏敬表現・讃称ないしそのものを賞める美称なのである。

次に、タカについて。フトが「太し」という形容詞と同源であるごとく、タカは「高し」と同源である。さらに、豊かなことを讃めるトヨや、「大き」と同源である「オホ」も加えて、壮大なもの・高いもの・豊かなもの・広大なものを表わすことばは、讃賞のことばとなる。

輕皇子の安騎の野に宿りし時に、柿本朝臣人麻呂  
の作りし歌

やすみしし わが大君 高照らす（高照） 日の皇子  
神ながら 神さびせすと 太敷かす（太敷為） 京を  
置きて… 『萬葉集卷第一 45』

の「高照らす」は「日の皇子」にかかることばで、ここに日の神信仰があらわれている。

右のフトの項に掲げた

冬十月、難波宮に幸したまひし時に、笠朝臣金村  
の作りし歌一首 短歌を并せたり

…続麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて（太高敷而） 食す国を 治めたまへば…

『萬葉集卷第六 928』  
の場合、フトとタカとが同時に用いられている。この場合

には、タカは讃称である。

以上、見てきたように、ほめ詞・美称の接辞と呼ばれていることばは、そのものをほめたたえる讃称からそのものの美しさを賞めることばとなったものであった。さらに讃称は、カミに対する畏敬の念に発する。イ(ツ)・ユ(ツ)・マ・ミ・サ・フト・タマ・タカ(そしてタも)などは、カミに対する畏敬に発し、讃称ともなる。そしてマ・ミ・サ・タマなどは美称にもなる。

ミは、後に、本来の意義を忘れられたり(オミオツケ)、美化語になったり(ミ手・オミ足)するが、上代においては、畏敬・讃称・美称の接辞である。

## 二 讃称のトヨ・ウヅノと尊称のオホ

### 二一 トヨ、ウヅノ

右のイ(ツ)・ユ(ツ)・マ・ミ・サ・フト・タマ・タカなどは、畏敬・讃称・美称の接辞であった。しかるに、畏敬の接辞の用法はなく、讃称の意義のみを有する接辞もある。トヨ・ウヅノなどである。

トヨについて。

天皇の、酒を節度使の卿等に賜ひし御歌一首 短

歌を并せたり

：天皇朕 うづの(宇頭乃) 御手もち かき撫でそ  
ねぎたまふ うち撫でそ ねぎたまふ 帰り来む日  
に 相飲まむ酒そ この豊(豊) 御酒は

〔萬葉集卷第六 973 聖武天皇〕

「豊御酒」のトヨは、豊かなものを讃えることばである。ウヅノについて。右の973の歌には、ウヅノということばが用いられている。日本書紀にも、

伊弉諾尊曰、吾欲生御寓之珍子：珍、此云于國、

〔神代紀第五段一書第二〕

〔『日本書紀 上』八九頁〕

の例があり、高貴なもの・珍しいもの・美しいものを讃えることばである。これは、ノという語尾がついていて、ここまで述べてきた接辞より、新しい接続のしかたをする形容動詞に近いものであるが、形容動詞としてしての用例はなく、ウヅノの形で、讃称となる例のみである。

以上、トヨ・ウヅノなどは、讃称のことばである。これらは、前に述べたイ(ツ)・ユ(ツ)・マ・ミ・サ・フト・タマ・タカなどが讃称として用いられるようになったのと平行して使用された、新しい讃称のことばである。

フトが「太し」という形容詞と同源であるごとく、タカは「高し」と同源である。さらに、豊かなことを讃めるトヨや、「大き」と同源である「オホ」も加えて、壮大なもの・高いもの・豊かなもの・広大なものを表わすことばは、讃賞のことばとなる。

と述べた。「大峰 意富衰」(古事記八九歌謡)や「大船 於保夫称」(萬葉集卷第十五3611)などのように大きなことを示すもの、「大をそ鳥 於保乎曾杼里」(萬葉集卷第十四3521)や「大雪 大雪」(萬葉集卷第二103)のように程度・量の甚だしいことを表わすもののほかに、「おほみこと 勅旨 反云大命」(萬葉集卷第五894)のような、尊称となるものがある。これにはカミに接して「大神 大神」(萬葉集卷第十九4264)となるものやキミに接して「大君ろ 淤富岐美呂」(古事記五七歌謡)となるものもある。(天皇や皇子をオホキミと呼ぶ。その萬葉集の表記のうち、「大王・王」は天皇のほか、皇子・王・女王を指すが、「大皇・太皇・皇・大君」はすべて天皇を指す、と従来言われているが、皇子に「皇」の字を用いたものが一例ある。)

また、「大御神たち 大御神等」(萬葉集卷第五894)や「大御酒 意富美岐」(古事記四八歌謡)のように、オホミの形で接するものがある。これが、後の時代に対人関

係に基づく尊敬語となるものである。ただし、萬葉集卷第十七3930の歌に「国つみ神 久尔都美可未」、古事記一〇一歌謡に「豊御酒 登余美岐」の形もあるから、いまだオホミで一語としてまとまったものではなかった。

へ一六に掲げたように、沖森卓也編『日本語史』には、

◇尊敬語は既に七世紀から見られますが、この尊敬語には、体言に見られるものと用言に見られるものがあります。体言に見られるものには、種々の接頭語があげられ、「おほみ」「みー」、また美化語的な「ふとー」「たまー」などがあります。

(同書、一〇二頁)

とある。へ一三に述べたミ、および、ここに述べたオホミは、後の時代の対人関係に基づく尊敬語につらなるものである。が、この時代、ミは畏敬・讃称・美称の接辞であり、オホミは尊称のオホと讃称のミとの二語である。

#### 〔附〕 カミ

へ一において、いわゆるほめ詞・美称の接辞が、カミに対する畏敬の念に発し、讃称・美称の接辞になつていったことを述べた。新潮日本古典集成の頭注には、

◇接頭語「御」は峠の神への畏怖を表わす。

のように、「畏怖」という表現さえも為されていた（39頁）。カミはたたえられるだけの存在ではない。時には「畏怖」されることすらあるのである。この観点がないために、従来のカミに対する畏敬の説明は、せいぜい、「ほめ詞」「そのものをたたえることば」というにとどまってきた。ここで、日本人が何をカミと呼び、何を思ってきたのかを述べる。

### 萬葉集の中に、

柿本朝臣人麻呂歌集の歌に曰く

葦原の 瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ国 しか  
れども 言挙げぞ吾がする 事幸く ま幸くませと  
つつみなく 幸くいまさば 荒磯波 ありても見むと  
百重波 千重波しきに 言挙げす吾は 言挙げす吾は

### 反歌

磯城島の 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ ま幸く  
ありこそ 〔萬葉集卷第十三 3253・3254〕

と詠った歌がある。ヤマトノクニは、葦原の中に水田を作り、稲を育てることを推進してきた。水田耕作をするためには、自然の運行に即し、共同作業を行なう必要がある。自然の大きな力が、わたくしたちに恵みを与え、また、わざわいをもたらすこともあるが、その力をわたくしたち

の祖先は、カミと呼んだ。一本の木にキのカミが宿る。その木から机が作られ、それが机として機能するとき、そこにツクエのカミが宿る。そうして、森羅万象あらゆるモノ・コトにカミが宿る。

豊かな稔をもたらすのもカミの為わざであり、水害やひでりを起こすのもカミの為わざである。善きことを起こすエネルギーも悪しきことを起こすエネルギーも、すべてカミの力である。荒御魂・和御魂といって、カミには猛々しい面と柔和な面とがある。たとえば、平安時代の土左日記の中に、風が吹いて荒れる海に、海のカミを和らげるために、鏡を献じるくだりがある（承平五年二月五日の条）。

カミは恐ろしい力をもったものであるのである。カミは、創造主・救世主ではなく、恵みを与えてくれる感謝の対象であるのみでなく、畏怖の対象でもある。

…斎瓮を 斎ひ掘りする 竹玉を 間なく貫き垂れ  
天地の 神をそ吾が祈む：

〔萬葉集卷第十三 3284 相聞〕

…倭文幣を 手に取り持ちて 竹玉を しじに貫き垂れ  
天地の 神をそ吾が祈む：

〔萬葉集卷第十三 3286 相聞〕

…木綿だすき 肩に取り掛け 斎瓮を 斎ひ掘りする  
天地の 神にそ吾が乞ふ：



〔萬葉集卷第十三 3288 相聞〕  
などに、カミに祈る様が画かれている。

忽ちに、京に入らむとして懷を述べし作を見て、  
生別悲しくして、斷腸万廻、怨緒禁め難し。聊か  
に所心を奉りし一首 二絶を并せたり

：磯波山 手向の神に 幣奉り（奴佐麻都里） あが  
乞ひ禱まく…

〔萬葉集卷第十七 4008 大伴池主〕  
のように幣を奉ることが、多くおこなわれていたであらう。  
この4008の歌には、

玉梓の 道の神たち 賂はせむ（麻比波勢牟） あが  
思ふ君を なつかしみせよ

〔萬葉集卷第十七 4009 大伴池主〕  
のような反歌があつて、4008の歌で「幣」と言つたもの  
を「賂」の語に換えている。<sup>⑩</sup> 4009の歌は、京に上る  
家持の旅の安寧を道の神に願うものである。ほかに「賂」  
の語の出くる歌には、

人の宅に宴せし歌三首  
わがやどに 咲けるなでしこ 賂はせむ（麻比波勢  
牟） ゆめ花散るな いやをちに咲け

〔萬葉集卷第二十 4446 丹比国人真人〕  
のようなものもあつて、この歌は、なでしこの花に願う歌

である。左大臣橘諸兄の長寿を祈る寿歌である。

湯原王の月の歌二首

天にます 月読をとこ 賂はせむ（幣者將為） 今夜  
の長さ 五百夜継ぎこそ

〔萬葉集卷第六 985 雜歌〕

の歌は、月読をとこに願っている分、多少、神祇に触れる  
が、これも明るい歌である。万葉仮名は「ヌサ」と同じ  
「幣」の字で、「マヒ」と訓ませている。「はせむ」の形  
から、この「幣」を「マヒ」訓じることができる。

男子、名古日を恋ひし歌三首 長一首、短二首

反歌

若ければ 道行き知らじ 賂はせむ（末比波世武）  
下への使ひ 負ひて通らせ

布施置きて（布施於吉呂） 吾は乞ひ禱む あざむ  
かず 直に率行きて 天路知らしめ

〔萬葉集卷第五 905・906〕  
905・906の歌は、幼くして亡くしたわが子が無事に  
天に行き着けるように願う親の歌である（905の歌で  
「賂」とするものを、906の歌では「布施」と仏教語に  
置きかえている。「天路」とあるのであるから神道なので  
あるが、仏教語を用いるところに、この時代の仏教の受け  
入れ方があらわれている）。「幼くて、天に行く道がわから

ないだろう。賂を奉るから、おんぶして連れて行ってやうてください。」とは、あまりに悲しい親心である。この賂のありかたは、土左日記の鏡につながる。カミに祈るのは、単にカミの加護を願うのみならず、荒ぶるカミを和らげる思いもあるのである。

そのカミに祈るとき、わたくしたちは、願いをあらわに口にするのではなく、また、何を願ったか他人に言うことはない。言挙げはしない。口にすれば願いは飛散してしまう。言葉には霊力が宿っていて、言葉が悪い力に利用されるのを恐れるのである。また、忌み言葉というものがあつて、現代でも、死や苦に通じる四・九の数字を嫌ったり、結婚式のスピーチにキレル・ハナレルなどの語を避けたりする。逆に、新年の挨拶に「アケマシテオメデトウゴザイマス」と言つて善き一年を言祝ぐ。豊作を祈り、収穫を祝う。このような自然への畏怖と感謝が、カミに対する敬語や讃称の接辞の発生する基盤である。

〈附〉のはじめに掲げた萬葉集卷十三 3253・3254の歌は、そのように言挙げしないことが常であるにもかかわらず、言霊を信じて敢えて言挙げして、予祝しようとの思いで、高らかに幸いを祈った歌である。韻律をもった歌であるから、祭祀に準じて、ことばがまっすぐにカミに届けられるのである。

また一方、共同作業を行なう中で、人々は価値観を共にする。同じ価値観をもった同質の人々の間で、自己を主張せず相手に即して生きる。そして自然にゆだねる、自然の力につつまれて生きる。現代のわたくしたちが、日常生活において、言葉には出さずに相手の気持を推し測る気配り・心遣いを大切にすることも、こうした水田耕作のこととする生活の中で培われてきた文化である。これが日本語のヒトとヒトとの待遇・敬語にあらわれる。

そしてまた、ヒトは、自然につつまれて生き、自然に帰つていく存在である。ヒトは死ねばカミになる。

萬葉集の挽歌の中に、皇子がカミとなることが表わされたものがあるが、

弓削皇子の薨ぜし時に、置始東人の作りし歌一首

短歌を并せたり

やすみしし 吾が大君 高光る 日の皇子 ひさかた  
の 天つ宮に 神ながら 神といませば（神等座者）  
そこをしも あやに恐み：〔萬葉集卷第二 204〕  
これは、日の皇子であるからだけではない。日本の神道では、ヒトは死ねばカミとなる。

日本挽歌一首

：恨めしき 妹の命（美許等）の あれをばも いか  
にせよとか にほ鳥の 二人並び居 語らひし 心そ  
むきて 家離りいます（伊摩須）

〔萬葉集卷第五 794 山上憶良〕  
弟の死去せしを哀しみて作りし歌一首 短歌を并せ  
たり

：箸向かふ 弟の命（命）は 朝露の 消やすき命  
神のむた 争ひかねて 葦原の 瑞穂の国に 家なや  
み また帰り来ぬ 遠つ国 黄泉の界に 延ふつたの  
己が向き向き 天雲の 別れし行けば：

〔萬葉集卷第九 1804 田辺福麻呂之歌集出〕  
など、亡くなつた人に「ミコト」という尊称を付けること  
が多いのも、亡くなつた人がカミになつたからである。亡  
くなつた人に「ミコト」を付けるのは、神道では現在にも  
続いている。すなわち、日本人の考えでは、カミとヒトと  
は、死によつて断絶しながらも、連続した存在なのである。  
（なお、794の歌の最後に「家離りいます」と敬語が用  
いられている。この歌にはほかにも「来ます」「臥やす」  
など、妻に対する敬語が用いられている。これは、亡き妻  
を偲び尊ぶ気持があらわされたものである。）

このこととは別に、萬葉集には、現人神の考えがあらわ

されている。

壬申の年の乱の平定して以後の歌二首

大君は（皇者） 神にしいませば（神尔之座者） 赤  
駒の 腹遣ふ田居を 都と成しつ

右一首、大將軍右大臣大伴卿作。

〔萬葉集卷第十九 4260〕  
大君は（大王者） 神にしいませば（神尔之座者）  
水鳥の すだく水沼を 都と成しつ 作者未だ詳らかなら  
ず

右の件の二首は、天平勝宝四年二月二日に聞  
きて、即ちここに載するものなり。

〔萬葉集卷第十九 4261〕

天皇の雷岳に御遊びたまひし時に、柿本朝臣人麻

呂の作りし歌一首

大君は（皇者） 神にしいませば（神二四座者） 天  
雲の 雷の上に 廬りせるかも

〔萬葉集卷第三 235〕

長皇子の獵路の池に遊びし時に、柿本朝臣人麻呂  
の作りし歌一首 短歌を并せたり

或る本の反歌一首

大君は（皇者） 神にしいませば（神尔之坐者） 真  
木の立つ 荒山中に 海をなすかも

235の歌の題詞の「天皇」について、新大系本注に

◇題詞の「天皇」は、天武か持統か文武か、確定できない。持統とする説に従う。

と言う。今、これに従う。「天皇」の文字は、天武天皇の頃から用いられるようになったものであり、また、天皇を現人神として崇める考えも、天武天皇の頃よりおこった。壬申の乱の後、天武天皇が律令による古代統一国家をまとめ、この時に古代天皇制が確立したからである。ただし、241の歌では、皇子を現人神としている。このことにも注意しておきたい。

この現人神の思想は、まったく新しいもので、一般のカミ概念とはかけ離れたものであることは、言うまでもない。この時カミガミは隠れ、ヒトは大自然を忘れ、ヒト中心の政事が始まったのであった。

(二〇〇七・九・三十)

注

(1) 時代別国語大辞典上代編 (三省堂 一九六七年) 「ゆ斎」の項に、

形状言。ユ・ユツの形で接頭語的に用いられ、斎み

清めた・神聖な意を添えて美称をなし、またユウシ・ユマフ・ユマハルなどの語幹となっている。

と言ひ、【考】に、

同様の意のイがあり、それに敵イツという形がある。斎ユムはまたイムともいう。

：イ・ユを冠する語は大体①植物名と、②神のために用意されたものにほぼ限定できる。①でも②でも、神のものとして清められ斎いかわれた意に解せるが、そこから①は神の物のように美しく繁茂したの意に、②は清らかなものの意に、すなわち美称として用いられる経路が開かれている。元来神に関連のある、信仰的価値に對して与えられたほめ詞が美称となることは、接頭語ミにおいても著しい(↓ゆついはむら【考】)。

と言う。

(2) 講座国語史5『敬語史』第二章「古代の敬語I」四七頁、

四九頁。大修館書店 一九七一年

(3) 時代別国語大辞典上代編「み」の項には、

接頭語。畏敬の念をもつて物を指すときや物をほめたたえていうときに用いる。

【考】その物の所有者または関係者が尊敬・畏敬すべき者であることが、この接頭語によって示されることが多く、敬語の接頭語とされる。そのような個々の例をその関係者によつて分ければ、①天皇・皇族の物、ひいては宮中・朝廷の物②神に関する物 ③仏の物 ④一般に、尊い人の物 等。④⑤は、結局③にまとめられはするが、一々の語については、ミウといえはその関係者が慣用的に一定しているものが多いので、分けてみることに

できる。：

とあり、また、

【考】：以上は敬語の接頭語として用いられた例であるが、その他、㊦マやユ・ユツなどのような、美称といわれる用法の例もあり（ミ草・ミ空・ミ冬・ミ陰・ミ酒等）、その中に㊧地形名にミのついたもの（ミ山・ミ嶺・ミ坂等）と、㊨器物の名に付いたもの（ミ甕・ミ籠・ミ鉤・ミ杯・ミ掘串）とが顕著に認められる。㊩はおそらく元来神の場所であつたからと思われ（↓みさき【考】）、㊪㊫を含めて㊬は神・信仰との関係を求めることができる（↓ゆ【斎】【考】）。

とある。

- (4) この「真つ青な massaona」に入る「s」の音は、「みしね 御稻 missine」（神楽歌 細波）岩波日本古典文学大系『古代歌謡集』一九五七年）「波流佐米 春雨 harusame」（萬葉集巻第十七 3969）などの「s」と同じで、複合語の後項が母音で始まる際に「s」が入るものである。今の接辞のサとの関係は改めて考えたい。

- (5) 岩波新日本古典文学大系4086歌の注に、

「さ」は接頭辞だが、歌では常に「さ百合」という。単に「百合」といった例は、万葉集には見えない。

- (6) と言う。単に「百合」といった例はないが、「草深百合」の例（七 1257、十一 2467）はある。常に「さ百合」と言うわけではない。

（7）このような用字は、ほかに「河波 カハ」「孤悲 コヒ」などがある。

- (7) 岩波新日本古典文学大系の注には、

「玉床」は、「床」の美称、既出（三六）。「私注」に「七夕の夜の会のための、織女の心事を其の立場で人間が作ったので、つい人間からの見方が出てしまったのである」と指摘している。

とある。土屋文明『萬葉集私注 五』（筑摩書房、一九六九年）の、この歌の「作意」に、

七夕の夜の会のための、織女の心事を其の立場で歌つたのである。自ら玉床と云つたりするのは、人間が作つたので、つい人間からの見方が出てしまったのである。

とある部分をいう。

が、このタマは単なる美称でもなく、土屋文明氏の言のうな、「人間からの見方」でもない。

- (8) オホキミは、首長を指すキミに尊称のオホの付いたものである。時代別国語大辞典上代編には、

◇天皇以下の皇族に、男女にかかわりなく用いる尊称。

と言い、【考】の欄に、

◇万葉で「大皇・太皇・皇・大君」などの字はすべて天皇を指す場合に用いられ、皇子・王・女王を指したものはない。一方、「大王・王」の字は、いずれの場合にも用いられている。：

と言う。また、春日和男氏も

◇オホキミは、天皇およびそれ以下の皇族に対して用い、男女を問わない。：通常、歌謡では「やすみしし和賀意 富岐美能遊ばしし」（雄略記）におけるがごとく、枕詞「やすみしし」を付した例が多くなる。かかる場合でも必ずしも天皇そのものを指すとは限らない。：しかし万葉では、オホキミの字面で「太皇・大皇・皇・大君」

はすべて天皇を指す場合に用い、「大王・王」は、そのいずれにも適用する用字法をとっている。

と言う（講座国語史5『敬語史』第二章「古代の敬語I」五四頁。しかしながら、皇子に「皇」の字を用いたものが一例ある。

オホキミの周辺語は、

古事記に「オホキミ」二例（自称一例）、「オホキミロ」一

例

「ワガオホキミ」四例、「女鳥のワガオホキミ」

一例

日本書紀に「オホキミ」七例、「オホキミロ」一例

「ワガオホキミ」四例

萬葉集に「オホキミ」八十例

「ワガオホキミ」四十六例、「ワゴオホキミ」十

一例

存する。

このうち、オホキミが皇子を指すものは、古事記の「女鳥のわが王」のほか、萬葉集の、

①一

45

大王

輕皇子を指す

②二

167

王

日並皇子を指す

③二

196

王

明日香皇女を指す

④二

198

王

明日香皇女を指す

⑤(二)

199

大王

天武天皇を指す

二

199

大王

高市皇子を指す

二

199

大王

高市皇子を指す

二

199

大王

高市皇子を指す

⑥二 202

王

高市皇子を指す

⑦二 204

王

弓削皇子を指す

⑧二 205

王

弓削皇子を指す

⑨(三) 235

皇

持統天皇を指す

三 235或本

王

忍壁皇子を指す

⑩三 239

大王

長皇子を指す

三 239

於富吉美

長皇子を指す

⑪三 240

大王

長皇子を指す

⑫三 241

皇

長皇子を指す

⑬三 261

大王

新田部皇子を指す

⑭三 420

王

石田王を指す

⑮三 475

王

安積皇子を指す

⑯三 476

王

安積皇子を指す

⑰三 477

王

安積皇子を指す

⑱三 478

王

安積皇子を指す

の二十一例である（カッコ内は、同一の歌の中に、天皇を指したオホキミが混在するものを挙げた）。

右にも述べたごとく、時代別国語大辞典上代編「おほきみ」の項の【考】には、

◇万葉で「大皇・太皇・皇・大君」などの字はすべて天皇を指す場合に用いられ、皇子・王・女王を指したものはない。一方、「大王・王」の字は、いずれの場合にも用いられている。

とある。⑨は、

天皇の雷岳に御遊たまひし時に、柿本人麻呂の作りし

歌一首

大君(皇)は 神にしいませば 天雲の 雷の上に 廬

りせるかも

右は、或る本に云く、「忍壁皇子に献りしものなり」といふ。その歌に曰く、「大君は 神にし座せば 雲隠る 雷山に 宮敷きいます」といふ。

〔萬葉集卷第三 235〕

で、天皇は諸説あるが持統天皇とする説が一般である。本文のオホキミの字は「皇」である。或本ではオホキミの字は「王」となり、忍壁皇子を指すと言う。この場合、時代別国語大辞典の【考】によく適っている。

ところが、⑩から⑫は、

長皇子の獵路の池に遊びし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌一首 短歌を并せたり

やすみしし 吾が大君（吾大君） 高光る 吾が日の皇子の：

いやめづらしき 吾が大君（吾於富吉美） かも

反歌一首

ひさかたの 天行く月を 網に刺し 我が大君（我大君）は 蓋にせり

或る本の反歌一首

大君（皇）は 神にしいませば 真木の立つ 荒山中に海をなすかも

〔萬葉集卷第三 239・240・241〕

とあるもので、「或る本の反歌一首」の中ではあるが、長皇子を指す「オホキミ」に「皇」の字が用いられているのである（この歌は、〈附〉において、長皇子が現人神とされていることに注意している歌でもある）。

したがって、時代別国語大辞典上代編にある

◇万葉で「大皇・太皇・皇・大君」などの字はすべて天皇を指す場合に用いられ、皇子・王・女王を指したものはない。

や春日和男氏の説は、否定されることになる。

また、このオホキミにヤスミシシという枕詞が懸かることがある。「ヤスミシシ」は、通常、「八隅を知ろしめす（天皇）」の意で、「我が大君」「我が大君」にかかる枕詞であると考えられている。

時代別国語大辞典「やすみしし」の項に、

◇枕詞。我が大君・我が大君にかかる。八隅を知ろしめす天皇の意でかけたか。

と言う。しかし、「やすみしし わが大君 高光る 日の皇子」として皇子を讃める歌の用例もある。①から⑫に挙げた皇子たちのうちに、

①やすみしし 吾大君 高照らす 日の皇子

〔萬葉集卷第二 167 日並皇子を指す〕

⑤やすみしし 吾大王の 天の下 奏したまへば…

〔萬葉集卷第二 199 高市皇子を指す〕

⑦やすみしし 吾王 高光る 日の皇子

〔萬葉集卷第二 204 弓削皇子を指す〕

⑩やすみしし 吾大王 高光る 吾が日の皇子

〔萬葉集卷第二 239 長皇子を指す〕

⑬やすみしし 吾大王 高照らす 日の皇子

〔萬葉集卷第三 261 新田部皇子を指す〕など、「わが大君」に「やすみしし」という枕詞の用いられているものがある。ヤスミシシは「我が大君」「我が大君」に懸かる枕詞で、通常、「八隅を知ろしめす（天皇）」の意で

あるととらえられている。ヤスミシシは萬葉集には全二十七例あるが、そのうちに五例、このような用例があり、挽歌のみならず雑歌の場合もあるので、(挽歌であれば、カミとなつて天上からあまねく地上を知ろしめすという解釈も成り立ち得ようが)、「八隅を知ろしめす(天皇)」の解釈は、原義ではないと考える。

——以上、ヘオホキミ・ヘヤスミシシ・ワガオホキミについて、平成一七年度佛教大学国語国文学会(二〇〇五年一月二六日)において発表したものの一部をもとに作成した。——

(9) 土左日記 承平五年二月五日の条

：かくいひてながめつゝくるあひだに、ゆくりなくかぜふきて、こげどもこげども、しりへしぞきにしぞきて、ほとほとしくうちはめつべし。かぢとりのいはく「このすみよしの明神は、れいのかみぞかし。ほしきものぞおはすらん。」とは、いまめくものか。さて、「ぬさをたてまつりたまへ。」といふ。いふにしたがひて、ぬさたいまつる。かくたいまつれども、もはらかぜやまで、いやふきに、いやたちに、かぜなみのあやふければ、かぢとりまたいはく、「ぬさにはみこゝろのいかねば、みふねもゆかぬなり。なほうれしとおもひたふべきものたいまつりたべ。」といふ。また、いふにしたがひて、「いかがはせん。」とて、「まなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞみをたいまつる。」とて、うみにうちはめつればくちをし。されば、うちつけに、うみはかゞみのおもてのごとなりぬれば、あるひとのよめるうた、

ちはやふるかみのこゝろをあるゝうみにかゞみをいれてかつみつるかな

いたく、すみのえ、わすれぐさ、きしのひめまつなどいふかみにはあらずかし。めもうつら／＼、かゞみにかみのこゝろをこそはみつれ。かぢとりのこゝろは、かみのみこゝろなりけり。

(岩波日本古典文学大系『土左・かげろふ・和泉式部・更級』一九五七年)

(10)

土左日記では、幣で効力がないため、あらためて鏡を海のカミに奉っている。あるいは、この場合にも、幣と略とは別物で、幣のほかは略を奉つたものであるかもしれない。ただ、後に掲げる萬葉集卷第六九八五の歌で「幣者將為」と書いて、「略はせむ」と訓ませているから、ここは幣と略とが同じものである、と考えておく。

(11)

カミに祈るのは加護を願つたり、荒ぶるカミを和らげる思ひからである。近年、神社に御利益を求める人があるが、神社に詣でて御利益はない。